

書 評

池谷和信：『トナカイの大地、クジラの海の民族誌
一ツンドラに生きるロシアの先住民チュクチ』明
石書店、2022年3月刊、199p.、3,800円（税別）

本書は、ロシア最東端に位置するチェコトカ自治管区（以下、チェコトカ）の先住民チュクチについて、丹念なフィールドワークに基づく研究の成果である。評者にとって未知の地域であり民族だが、社会主義体制崩壊に伴う社会の変化とそこに暮らす民族集団を対象にした研究には、同じく社会主義体制後の東ヨーロッパで少数民族集団について調べてきた立場から、どこか似通った話題があるのでは、と感じて筆を執ることにした。

著者は長らくアフリカや中央アジアで生態人類学の視点から多くの研究を積まれており、このたびはフィールドをツンドラに移して調査した成果である。極北の厳しい環境のなかで暮らしてきた人々の営みは、まさに自然と人間の関係を論じるにふさわしい。それゆえに本書を手取るのも、そうした関心をもつ読者が多いものと想像される。そこでここでは、評者の関心からあえて社会の変化と少数民族集団を意識しながら紹介する。

チェコトカは人口が少なく、ツンドラの地域である。そこに暮らすチュルクには遊牧民というイメージが定着している。果たしてそうなのか。本書はこの疑問の答えを探そうと、極北の地に向けて出発するところから始まる。そして想像していたツンドラの暮らしとの違いに驚き、次々に湧き出る疑問を抱えて現地を歩いた経緯が書かれている。読者は著者の驚きをともにしながら、この先に書かれているであろう新しい発見に期待しつつ読み進めることになる。さっそく章を追って内容を見ていこう。本文は序論に続いて八つの章で構

成されている。

まず「序論 チュクチの調査に向けて」では、人口が少ないチェコトカでは市場規模が小さく、資本主義が発達しにくいことから、国家の強い管理下に置かれることになったという推理から始まる。そのうえで、それでは地域の個性を描きにくいと考えて、マイクロ空間での民族誌とメソ空間の地域研究、地球空間の人類史という三つの視角を統合する方法をとっている。この空間スケールの違いは、そのまま時間スケールの違いに対応しており、ち密な現地調査の結果をグローバルスケールの議論に発展させるという、地理学が最も得意とする視点を踏襲している。まさにサバンナや乾燥地域でのフィールドワークを積んできた著者の真骨頂といえよう。

「第1章 日本からロシアのツンドラへ」は、初めてチェコトカに向かった時の経験と現地観察結果がまとめられている。北極海に臨む人口500人足らずのレトクーチ村。ここではトナカイの放牧が行われている。調べるとトナカイの頭数についての統計があり、現地の住宅が集中暖房の設備が整った集合住宅をはじめ、病院や学校や発電所など、どれも国が管理している。著者がこれまで見てきたサバンナの放牧と違って、国家の関与が強いことに驚く記述が興味深い。ここではソ連時代に国営農場に組み込まれたことが、今日まで続いているのだという。

「第2章 ツンドラの“陸の世界”」は、その副題に「トナカイと人」とあるように、チュクチのキャンプを訪ね、彼らが住むテントに寝泊まりしながら彼ら固有の衣食住に触れた体験が綴られている。特にトナカイ肉だけの食事のシーンは生々しい。トナカイの皮で覆われたテントの中で、寄り添う

ようにして肉だけを食べる。厳しい自然環境に適応した暮らしだが、他の環境に暮らしてきた人間には手ごわい生活文化である。一方、社会主義時代以来、国営農場にはブリガータと呼ばれる生産隊がいくつもあり、チュクチのトナカイ放牧はブリガータで営まれている。ロシア人の農場主による管理のもとでチュクチが働いており、放牧がロシア経済の枠組みのなかにあることを理解することができる。

「第3章 トナカイの民のエスノヒストリー」は、チュクチの暮らしの歴史について、20世紀前半におけるチュクチの交易活動を中心にまとめている。チュクチは、陸上でトナカイの牧畜を中心とするトナカイチュクチと、沿岸部に居住して海獣の狩猟を主とする海岸チュクチに区別される。

また文献や資料に従うと、チュクチと西から進出してきたロシア人との交易が18世紀頃からさかのぼって確認できる。ロシア側からのタバコやナイフ、ヤカンが、チュクチ側からのシベリア狐やトナカイの皮、セイウチの牙などと交換された。しかし、その一方で興味深いのは、ベーリング海を介してアメリカ人の間で交易が積極的に行われてきた事実である。アメリカ側から銃やヤカン、鍋や斧など、チュクチ側からはホッキョクギツネやオオカミ、トナカイの毛皮が提供されたという。

「第4章 変わりつつあるトナカイの村」は、社会主義後の変化として国営農場が存続したところもあれば、会社組織に転じたところもあるなど村レベルで多様だと指摘している。それと同時にチェコトカのトナカイ飼育頭数が激減したのだが、原因としては企業化したものの経営がうまくいかなかったことが挙げられている。実際にどのようなことが起きたのだろうか。その一方では市場経済が浸透し、カナダ資本の水産加工所が進出するなどして、トナカイ飼育からサケ漁業に転じた農村もあるという。社会主義後の社会や経済の変化

の詳細が気になるところである。

「第5章 ツンドラの“海の世界”」は、海岸チュクチに目を転じ、クジラ狩猟の実際が描かれている。クジラ狩猟は先住民生存捕鯨の一つである。クジラの肉や油が人間に利用されるほか、キツネやイヌの食料にもなっている。キツネの毛皮は現金収入源であり、イヌはそりを引くのに利用されるから、まさにクジラはチュクチの暮らしに欠かせない。クジラの狩猟に同行したときの描写も目を引く。船を出すところから実際のハンティングと解体、そして食卓のシーンまで一部始終が語られ、現場を映し出した写真が並べられている。この両方を追いながら、あたかもそこに居合わせているかの臨場感が味わえる。クジラの肉を囲む家族の写真からは和やかな雰囲気が伝わってくる。皮の部分の肉が人気なのだという。顔つきが日本人に似ているだけに印象に残る。こうなると、写真がすべてモノクロなのがじつに惜しい。

「第6章 変わりつつあるクジラの村」は、従来の研究と著者の実地調査から得た知見をもとにして、海岸チュクチのエスノヒストリーを描いている。これによると彼らが暮らしてきた村の変遷は、1900年頃までの海獣狩猟文化複合の時代、1930年代頃からの海獣狩猟が国営の時代、そして社会主義体制崩壊後の私企業と公企業が共存する新しい時期としてとらえられる。最近の動向はめまぐるしいようで、日本をはじめ近隣諸国との関係もこの地域の変化に大きな影響をもたらそうとしている。この近年の状況に関する生態人類学的研究はないとのことで、今後の研究を待ちたい。

「第7章 陸と海を越えて」は、副題に「3万年のホモ・サピエンス史、北方適応から極北適応へ」とあるように、ここではチュルクの事例から広くシベリアにおける人類史の構築を試みている。考古学や遺伝学の研究によれば、人類の居住地は約3万年前には北極海まで到達していたという。旧

石器時代には野生トナカイやマンモスを狩猟する生活があり、新石器時代以降、絶滅した陸上動物に代わって海獣類の狩猟が始まったと考えられる。さらに18世紀の帝政ロシア期にはロシア・チュクチ交易市場が開かれ、ロシア人とチュクチとの間の交易が盛んになる。また、アメリカ人も交易に加わり、広域の流通圏が形成された。こうしたなかでトナカイの牧畜も拡大した。最後に20世紀に、生産手段の近代化が進むとともにシベリアからサハリンにかけて「牧畜型」「飼育型」「遊牧型」の3タイプの牧畜形態まで引き出している。じつに壮大な論だが、現地調査をもとにして展開されているだけに説得力がある。ユーラシア大陸東部の広い地域の人類史に一石を投じるものといえよう。

しかもそのうえで、チュクチが伝統的にトナカイの多頭飼育を行ってきたため、社会主義時代を経て、今日まで伝統的な牧畜の形態を維持してきたという。ここには、国家の強い管理下にありながら、したたかに自身の暮らしを維持してきた民族集団の姿が垣間見えて興味深い。

「第8章 日本でのチュルクの紹介」は、著者が勤務する国立民族学博物館において、一般を対象に企画されたチュクチ紹介展示に言及されている。そのうえで、展示が主にチュクチのトナカイ牧畜と伝統生活であったために、本書にある農場経営のなかでのトナカイ牧畜に関する理解につながりにくかったという反省が述べられている。

厳しい自然環境のもとで培われてきた伝統的な暮らしは、極北に住む未知の牧畜民のイメージとよく対応する。そこで、自分たちの暮らしとかけ離れた生活文化ほど好奇の目が向けられる。著者の生態人類学研究の視座が現代社会のなかのチュクチの人々に置かれていながら、展示にそれが十分に生かせなかったとすれば、そこには特定の文化を特殊化してとらえようとする大衆の嗜好があり、それに応じざるをえない企画の上での事情が

あったからかもしれない。

じつは同じようなことは他でも起こっている。聞いた話であるが、国内でロマに関する展示がなされた際、幌馬車で移動したかつてのロマの暮らしを示す道具が並べられた。そのため見学者にはロマの特殊性だけが伝わり、差別され続けている彼らを理解することにつながらないという専門研究者の批判から、その展示は中止されたという。

著者が述べるように、モノだけを展示しては現在の彼らの暮らしや社会経済的事情は見えにくい。特定の間人集団を偏見なくとらえるためには、現実の彼らの暮らしや考え方をできるだけ拾い上げて紹介する努力が欠かせないであろう。

その点で、きわめて広い視野と見識のもとに実施されたフィールドワークをもとにした本書は、未知の土地に暮らすチュクチの姿を描くことに成功している。もちろん現時点で明らかにできていない点が多く残されており、今後の研究が期待される。チュクチの研究は端緒についたばかりというが、ここにきわめて質の高い学術書が出たことをまずは喜びたい。しかも、なにより到底出かけることのない極北の地にまるで居合わせたような読後感に浸り、得した気持ちになれる書である。フィールドワークに基づく外国地域研究の実際に触れられる好著であり、地理学の学生・研究者はもちろん、中高の教員にも広くお勧めしたい。

(加賀美雅弘)

山下清海：『華僑・華人を知るための52章』明石書店、2023年4月刊、328p., 2,000円（税別）

本書は、読者にもお馴染みの明石書店「エリア・スタディーズ」シリーズの一環として刊行された。同シリーズは、個別の国・地域を事例に、多様なトピックがまとめられ、読み物としても面白く、